

同朋大学仏教文化研究所蔵古書目録

— 應通文庫 —

市野智行

中川剛

藤村潔

松金直美

一、はじめに

同朋大学仏教文化研究所は、多くの古書を所蔵している。そのなかには寄贈による文庫もいくつかあり、その目録が、これまでに同研究所紀要において、随時報告されてきている。¹⁾

二〇一二年六月、愛知県豊橋市花園町の應通寺（真宗大谷派）より、八十四部一七三冊にわたる古書・図書の寄贈を受けた。一群の書物を「應通文庫」と称することとする。

應通寺は火災や空襲により、たび重ねて焼失に見舞われており、同寺の歴史を知りうる史料は残念ながら限られている。ただし同寺ではその淵源を次のように伝えている。大永年中（一五二二～二七）、三河国吉良平坂（西尾市平坂村）にある無量寿寺十二世了源の三男源明（または明源）（？～一五五〇）が、吉田川毛に来て無量寿寺と称する一字を建立した。開基源明の没後、再び平坂から来た了願（？～一六〇〇）が継承した。了願が住持を務めていた天正二年（一五七四）、当寺は現在地に移り、同年八月、寺号を「應通寺」と改めた。山号である「大永山」

は、川毛での創立年号に由来する。^②

應通寺は、吉田御坊（現・豊橋別院）をささえた五ヶ寺の一つである。同寺には、吉田御坊の前身である「吉田郷惣道場」宛として、文禄四年（一五九五）十月二十日に本願寺教如（一五五八〜一六一四）より下付された顕如影像が伝わる。教如は文禄元年（一五九二）、顕如（一五四三〜九二）没後にいったん継職するものの、翌同二年（一五九三）、豊臣秀吉の命により退隠し、弟の准如（一五七七〜一六三〇）が継職する。当寺所蔵の顕如影像によって、退隠後もなお本願寺門主としての活動を行った教如を支持する門末が当該地域にいたことを知りうる。^③

以上のような歴史を有する應通寺に、近世から近代にかけて蔵書群（「應通文庫」）が形成されていった。本稿では「應通文庫目録」【表3】を紹介するとともに、その内容・特色を詳しく見ていきたい。

二、應通文庫の概要

應通文庫は八十五部一七三冊の書物で構成されている。刊本が六十八部、写本が十七部であり、部数の八割近くを刊本が占める。その一覧を「應通文庫目録」【表3】にまとめた。江戸前期から昭和期のものまで幅広い年代にわたるが、江戸後期から明治期に出版あるいは書写・入手したと確かめられる書物が多い。同文庫の内容・特色を把握するため、便宜上、分類をした。分類名は、仏教、浄土、真宗、真宗（勸化本）、真

表1 應通文庫 分類別部・冊数

分類	部・冊数		刊本	写本	了智所蔵
仏教	22部	58冊	20部	2部	9部
浄土	1部	1冊	1部	0部	0部
真宗	17部	32冊	13部	4部	6部
真宗（勸化本）	12部	16冊	11部	1部	1部
真宗（講録）	7部	7冊	0部	7部	0部
儒学	10部	32冊	10部	0部	2部
史学	6部	10冊	6部	0部	2部
辞書	1部	2冊	1部	0部	1部
実学	1部	1冊	0部	1部	0部
文化	4部	8冊	4部	0部	1部
教育・心理・哲学	4部	4冊	2部	2部	1部
合計	85部	173冊	68部	17部	23部

宗（講録）、儒学、史学、辞書、実学、文化、教育・心理・哲学である。【表3】は分類別に整理した上で、分類内で編年順に並べた目録である。また、分類別の部・冊数を「應通文庫 分類別部・冊数」【表1】にまとめた。あわせて分類別の刊本・写本の部数も掲示している。

当文庫の書物の多くには、所蔵を示す署名や蔵書印がみられる。應通

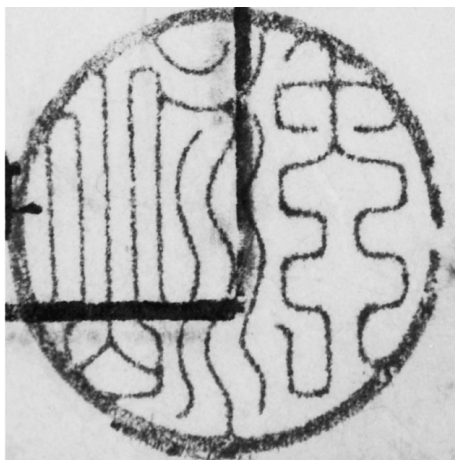


図1 大永山

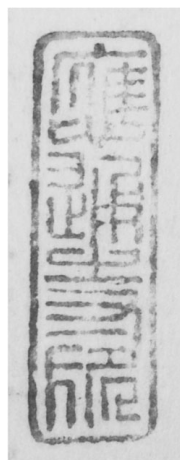


図2 應通寺印



図3 ミカワヨシタ應通寺



図4 おほかうち



図5 了智



図6 菴溪

寺の所蔵であることを示す蔵書印には、「大永山」【図1】、「應通寺印」【図2】、「ミカワヨシタ應通寺」【図3】、「おほかうち」【図4】がある。この蔵書（「應通文庫」）は段階的に形成されていったとみられるが、所蔵者として確かめられる人物として最も多いのが当寺十一世の大河内了智（一八七六～一九一七）である。資性温雅で和歌、俳諧、絵画をよくし、製陶にも通じていたともいい、また『現代の青年』と題する著書も執筆したという¹⁾。

了智は鐵鷲や菴溪といった号も用いていたようであり、蔵書を示す署名や蔵書印に、本名と共に確認できる。了智所蔵を示す蔵書印には、「了智」【図5】、「菴溪」【図6】がある。蔵書印は、所蔵先を明らかにするために捺印するものである。一定度の貸借を想定して捺印されている可能性も高い。了智所蔵本の傾向を把握するため、【表1】にて分類別に了智所蔵部数を示した。

三、大河内了智

大河内了智の経歴について、真宗大谷派の機関誌などからたどってみたい。了智の略年表を「大河内了智略年表」【表2】にまとめた。明治九年（一八七六）に生まれた了

表2 大河内了智略年表

和暦（西暦）	年齢	内 容	出 典
明治 9 (1876)	1 歳	誕生。	
明治 22 (1889)	13 歳	三河教校入学。	
明治 23 (1890)	14 歳	三河教校第 1 年級修了。	『本山報告』第 61 号
明治 24 (1891)	15 歳	三河教校第 2 年級修了。	『本山報告』第 74 号
明治 25 (1892)	16 歳	三河教校第 3 年級修了。	『本山報告』第 86 号
明治 26 (1893)	17 歳	三河教校卒業。	『本山事務報告』第 2 号
明治 27 (1894)	18 歳	真宗大学寮専門附属科修了。	『本山事務報告』第 10 号
明治 28 (1895)	19 歳	真宗第一中学寮第 1 部 3 年級修了。	『本山事務報告』第 23 号
明治 29 (1896)	20 歳	真宗第一中学寮第 1 部 4 年級修了。	『本山事務報告』第 34 号
同年	同 歳	真宗京都中学（真宗第一中学寮から改称）、12 月 19 日付退学処分。	『本山事務報告』第 40 号
明治 30 (1897)	21 歳	真宗東京中学第 1 部高等科第 2 年級卒業。	『本山事務報告』第 47 号
明治 31 (1898)	22 歳	真宗大学本科第 1 部 1 年級修了。	『常葉』第 28 号
同年	同 歳	「餘裕と同情」寄稿。	『無尽燈』第 3 卷第 11 号
明治 32 (1899)	23 歳	真宗大学本科第 1 部 2 年級修了。	『宗報』第 10 号
明治 33 (1900)	24 歳	休学か（修了生名簿に名前なし）。	『宗報』第 25 号
同年	24 歳	『健全なる青年』出版。	
明治 34 (1901)	25 歳	真宗大学本科第 1 部 3 年級修了。	『教学報知』第 614 号付録
同年	同 歳	『教如上人』出版。	
同年	同 歳	「反対運動の国民」寄稿。	『無尽燈』第 6 卷第 2 号
同年	同 歳	「佛に親む心」寄稿。	『精神界』第 1 卷第 3 号
明治 35 (1902)	26 歳	真宗大学本科第 1 部卒業。	『宗報』第 12 号
明治 38 (1905)	29 歳	「学師ノ称号ヲ授与ス」。	『宗報』第 45 号
大正 6 (1917)	42 歳	死去。	

了智は、明治二十二年（一八八九）、真宗大谷派における地方の教育機関の一つである三河教校に入学し、同二十六年（一八九三）に卒業している。同級生には山田文昭（一八七七〜一九三三）、一級上には佐々木月樵（一八七五〜一九二六）、船橋水哉（一八七四〜一九四五）がおり、真宗大谷派の名だたる学者となった人びとと共に学生生活を送る環境にあった。

その後、京都に上り、明治二十七年（一八九四）、真宗大学寮の専門附属科を修了。続いて、真宗第一中学寮第一部三年に編入した。そうしたところ明治二十九年（一八九六）、清沢満之の本山改革運動が起こった。白川党事件である。真宗京都中学の学生もこれに呼応して学生ストライキに参加したため、「所化ノ本分ヲ失シタル行為アルニ付」として、十二月には八十八名の退学者が出ることとなった⁵⁾。この中には、大河内了智も含まれていた。四月になって本山から復学の許しが通達され、八十名の退学者は真宗東京中学に転校し、復学した。了智は八月には第一期生として卒業し、真宗大学へと進学している。

この頃から、了智は執筆活動を行っていたようである。真宗大学の校友誌『無盡燈』の評論欄に「鐵鷲」の筆名で、明治三十一年（一八九八）に「餘裕と同情」、同三十四年（一九〇一）に「反対運動的国民」と題する小論を発表している⁶⁾。この雑誌には、主に真宗大学生が執筆した、研究論文や評論、また宗教界の動向に関するものから漢詩や俳句まで掲載されており、当時の真宗大学における学風を伝えている。了智が大学

在学中である明治三十三年（一九〇〇）に『健全なる青年』や翌三十四年（一九〇一）に『教如上人』⁷⁾などを出版したのもこのような言論空間に接していたからではないかと考えられる。その他、同三十四年『精神界』にも「佛に親む心」と題する寄稿がみられる⁸⁾。

当時、真宗京都中学や真宗大学に地方から集まった学生はエリートであり、その後、真宗大谷派を支えた優秀な人材を輩出した。地方教校や京都府尋常中学校（のちの真宗第一中学寮）の課程・教科書の一覧と、当文庫本を照合すると、一致するものも散見される。了智が所蔵した書物の多くは三河教校から真宗大学に在学していた期間に収集されたものであると考えられる。

以上のように了智は、三河教校から真宗大学まで宗門系学校において学問研鑽した、当該地域屈指の知識人であったとみられる。

四、應通文庫の内訳

1. 仏教

では分類別に應通文庫の書物を紹介していきたい。当文庫において最も特徴的な点は、仏教書が五十九部一四冊あり、全体の六割強を占めていることである。真宗寺院における蔵書の典型例と言えよう。仏教書を、さらに仏教、浄土、真宗、真宗（勸化本）、真宗（講録）に細分した。

真宗では江戸期における学寮・学林以来、「宗乘」と「余乘」に分類して、仏教が学ばれてきた。「宗乘」は宗派・宗祖の思想を学問の対象とするため、主に信仰論や教化学に軸を置く。一方「余乘」は宗乘以外の仏教教理を学問の対象とするため、主に仏教の基礎教理に軸を置いている。現代では名称を「真宗学」と「仏教学」に変更されている。明治以降の日本仏教界は、西洋の学術方法を導入し、サンスクリット・パールの文献などを解明していく学問体系が構築された。今日こうしたアカデミックな学問を「近代仏教学」ともいう。一方で江戸期以来の「八宗兼学」の学問体系も継承されていった。「八宗」とは俱舎、成実、律、法相、三論、華嚴、天台、真言の諸宗を示す。そして、これら諸宗の教義を広く学ぶことが重視された¹⁰⁾。

仏教学（余乘）に関する書物を「仏教」、浄土宗に関する書物を「浄土」、真宗学（宗乘）に関する書物を「真宗」、真宗書のうち勸化本と講録は、「真宗（勸化本）」「真宗（講録）」と、別に分類した。

本項では二十二部五十八冊ある「仏教」について取り上げる。そのうち、了智が所蔵したと認められる書物が九部と半数近くを占め、また大半が刊本である。了智所蔵書二十三部のうちで最も多いことから、了智は仏教学の研究を重視していたと言えよう。刊本で出版年の定かな書物の中で、江戸期が六部、明治期が七部ある。江戸期出版の六部のうち四部は確実に了智所蔵であったが、了智以前から應通寺に所蔵されていたか、了智が入手したかは不明である。

「仏教」には、俱舎、法相、華嚴、天台といった分野にわたる書物がある。日本仏教入門の綱要書である凝然（一二四〇～一三二一）の13『冠註八宗綱要』も所持している。当該期の仏教書には、本文の上欄に注記をした「冠註」といった形式が多い。また同書には了智によると考えられる朱や墨での加筆もあり、勉学に活用されたようである。俱舎学の文献では近世の大学匠である華嚴宗の鳳潭（一六五九～一七三八）が撰述した6『俱舎論頌疏』一冊（端本）や7『冠註講苑俱舎論頌疏』十一冊を所持している。7は全十四冊のうち巻二・三・七が欠本である。4『阿毘達磨俱舎論図紀』はインドの世親が説一切有部の立場で体系化した最大の仏教教理論である。原典の分量が極めて多いため、その要点を整理した論書が諸宗の中でも広まった。俱舎宗では主に「五位七十五法」の分析や「三世実有、法体恒有」といった因果論など仏教の基礎教義を説いている。

一般的に俱舎学と兼学された法相学の文献も所蔵されている。中でも明治期に有名であったとされる佐伯旭雅の14『冠導増補成唯識論』七冊がある。『成唯識論』とは初唐期に新唯識を将来した玄奘（六〇二～六四四）とその弟子慈恩大師基（六三二～八二二）が糅訳したものである。この『成唯識論』を頂点として法相宗は興隆する。平安初期の明詮（七八九～八六八）が『成唯識論道注』といったテキストを作成したが、その後、真興（九三四～一〇〇四）が返り点を付け、訓読の仕方を提示した。その後、明治期に入り、佐伯がこれを原本にして冠註や傍註を増補した

のが、この『冠導増補成唯識論』十巻なのである。残念ながら應通文庫本は、四、五、六巻が欠本であるが、法相唯識学を深く研鑽していた面が窺える。その他にも法相教理の大綱を整理した8・9『冠註略述法相義』の刊本（欠本あり）と21『法相義鈔』の写本も所持している（伝来については後述）。歴史上、俱舎宗は法相宗の寓宗となって吸収されるが、古来より諸宗の中で「唯識三年、俱舎八年」と呼ばれるように、この二宗の仏教教理は有機的に関係し合い、必ず習得しなければならぬものであったのである。少なくとも、了智をはじめとする應通寺の人びとが、こうした仏教教理の伝統に即して学んでいたことは明らかである。

華嚴学の書物文献では賢首大師法蔵（六四三〜七二二）の5『華嚴五教章』三冊を所持している。外題に「新鐫考異偏注華嚴五教章」と記されているが、一体撰者が誰でどのような意図で校注したのか不明である。『華嚴五教章』の正式名は『華嚴一乗教義分齊章』であり、法蔵がブツダ釈尊の直説を五教十宗に分類し体系化させて、『華嚴経』の別教一乗こそが大乗至極の教えであると宣説したものである。つまり、華嚴宗の教判論を究明する上で最も重要な論書であり、中国・日本では広く仏教者に読まれた文献である。

最後に天台学の文献であるが、当文庫では八宗の中で最も多い。天台智顛（五三二〜九七）撰とされる3『天台四教義』二冊が現存するが、智顛の『四教義』（大本四教義）にあたりと考えられる。同書も前掲の『華嚴五教章』と同様、天台宗の五時八教に基づく教判論である。これ

まで説いてきた釈尊一代の仏教は「四十余年未顕真実」の前説であり、『法華経』こそが一乗真実の極致であると宣説したものである。つまり、華嚴と天台の両学派は俱舎と法相の学派とは異なり、これまでのインド仏教の延長線上ではなく、新たな中国仏教として勃興した二大精華の宗派である。こうした教判論の伝統を日本仏教も広く受容したのである。

当文庫には他にも、趙宋天台の山家派四明知礼（九六〇〜一〇二八）が撰述した10『十不二法門指要鈔』全二冊や撰者不明の1『天台円宗四教五時西谷名目』全四冊もある。10は唐の天台六祖湛然（七一〜八二）が撰述した『十不二門』を註釈し、当時論争した山外派の説を論破するために湛然説の正当性を発揚した論書である。一方1は恵心僧都源信（九四二〜一〇一七）が撰述したと伝える『四教五時略頌』を初心者向けに解釈した論書である。山門派や寺門派の語句が明記されている点から、少なくとも撰述時期は源信以降の平安後期か鎌倉初期と想定される。同書の内容は前掲した智顛の『四教義』（3『天台四教義』）と同様なのであり、天台の五時八教を解説している。特に智顛が説いた蔵・通・別・円といった化法の四教に重点を置いて論述している。

3『天台四教義』は、源智なる人物が三河教校在学中である明治二十五年（一八九二）に古書店で購入し、表装し直した書物と分かる。ただし今のところ源智についてや應通寺が入手した経緯は不明である。源智は了智の学友であろうか。

「仏教」には二部のみ写本が含まれている。20『大乘五蘊論』は、文

化三年（一八〇六）夏に、應通寺と同じく吉田にある浄円寺（豊橋市大村町字黒下、真宗大谷派）において行われた了願なる人物の講義におけるテキストを、恵明という僧が写させてもらった書物である。了願は名前から判断するならば應通寺の人物である可能性が高いが、判然としない。その後の伝達経路は不明であるが、了智が所蔵するに至った。

21 『法相義鈔』は、次のように書写を繰り返して同寺に所蔵されることとなった。寛政元年（一七八九）夏に三河国の了願が記したものを、天保七年（一八三六）十月一日から同月二十二日にかけて、駿河国の鷲沼なる人物が書写した。明治になり、それをいかなる経緯によってか所有していた赤松なる師より、額田郡の大原善俊が借りて書写をした。それを了智が、先生である赤松の承諾を得て、明治二十八年（一八九五）二月九日から三月三日にかけて写したものが同書である。なお大原善俊は法専寺（岡崎市猪熊町）の子息と考えられ、了智とは真宗第一中学寮の同級生だったようである¹¹。

教校課程における余乗の科目として、第二年では『八宗綱要』をテキストに「諸宗大意」が、第三年では『七十五法名目』をテキストに「小乗ノ要義」が、第四年では『略述法相義』をテキストに「法相ノ要義」が定められている。また京都府尋常中学の教科書としても同様の書名が挙げられている。当文庫の8・9・12・13などは、三河教校や真宗第一中学寮において教科書として用いていたのではなからうか。さらに真宗京都中学では、余乗の授業として、「俱舎・法相要旨」「華嚴・天台要旨」

があり、¹²当文庫の書物がこれらのカリキュラムに即したものであると言えるのではなからうか。

2. 浄土、真宗

「浄土」の分類は、23 『黒谷上人語灯録（和語灯録）』一部のみである。『黒谷上人語灯録』は、浄土宗の宗祖たる法然（一一三三〜一二二二）の弟子である了恵道光（一二四三〜？）が、法然の法語・消息類を編纂した書の総称である。その中に、文永十二年（一二七五）の序をもつ『和語灯録』が収録されている。¹³ 23はその刊本である。

真宗書は全部で三十六部五十五冊あり、部数にして全体の四割を占めており、真宗寺院蔵書の特徴を示していると言えよう。真宗書について、さらに「真宗」「真宗（勸化本）」「真宗（講録）」に細分した。勸化本と講録は後述するように、真宗の学問・教化を考える上で特徴的な書物であると考へ、別に分類して次項以降で取り上げる。

「真宗」十七部三十二冊のうち、刊本が十三部と大半を占める。そのうち江戸期に出版されたものが五部、明治期が七部である。

真宗書の内容は、前述した江戸期以来の分類によれば宗乗にあたる。宗乗の学びとは、三経七祖の伝統を基底とする。三経とは、浄土三部経とも呼称され、『大経』『観経』『阿弥陀経』を指す。三経を貫くものは阿弥陀仏の本願を説くことにある。その本願との出遇いの伝統を、真宗の宗祖である親鸞（一一七三〜一二六二）は特に七人の高僧の上に見定

めていく。『正信偈』にも登場する七高僧である。時代の順に記せば、龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・源空である。古来より、上三祖は教相について、下四祖は安心について、その影響が顕著に見られると言われている。

應通文庫にも三経・七祖に関する書物が多く含まれ、24『教行信証』を筆頭に宗祖である親鸞撰述の聖教もいくつか確認できる。今日の学びは、数多くの参考書や先行研究を手がかりとして、七祖・宗祖の教学に触れることが多い。そのため直接その原典に当たることが少なくなっているように感じられる。他方、應通文庫の書物から、当寺では原典を直接のテキストとして学ばれていたことが分かる。

たとえば27・1『七祖御釈 安樂集 三』には、重要と考えられる部分に直接朱筆されている。『安樂集』は第四祖道綽（五六二〜六四五）の撰述である。道綽は、もとは涅槃学の研究者であり、涅槃経の講説を多く行っていたと伝えられている。後に玄中寺において曇鸞の碑文に出会い浄土教に帰した。この『安樂集』は『観経』を所依として、浄土教の教理を組織的に記した書物で、全部で十二大門から構成されている。親鸞は『教行信証』に多く引用し、特に正像末の三時史観や、聖浄二門判など大きな影響を受けている。應通文庫本27・1では、特に道綽自らが施設した「問答」の箇所にも多くの朱筆がみられる点特徴的である。道綽自身がどのような疑問をもって『安樂集』を記したのか。原典を直接のテキストとすることによって、道綽の理解を汲み取ろうとしている。

夥しい数の参考書や先行論文に囲まれている現代においては、ともすると原典に直接あたるといふ当然の手法が見失われてしまう。学問に対する姿勢を改めて問い直す必要性を痛感させられる。

また江戸期において真宗東派の中核的学問・教育機関であった学寮の講者による、僧侶向けの講義録の刊本がある。つまり江戸宗学を知りうる書物である。開悟院靈暈（一七七五〜一八五一）述の33『浄土論註講義』や雲澗院神興（一八一四〜一八七）述の35『選択本願念仏集講判』などである。両者ともに学寮におけるトップの教授職である「講師」に就任した学僧である。両書はともに『真宗大系』三七巻の「大谷派先輩著述目録」¹⁴にも記載されている。なお両書共に、刊行は明治中期である。33は明治二十五年（一八九二）、35は明治三十年（一八九七）である。

江戸宗学の講義録が明治期に刊行された点は興味深い。

47『改悔文便導本』は文政九年（一八二六）七月に、26『教行信証御自釈』は文政十一年（一八二八）夏に求めたことが分かる。了智所蔵と分かる書物は七部ある。28『文類聚抄 愚禿抄 入出二門偈 合刻』は、後表紙見返しへの書き込みに「明治式拾九年十一月於五条高倉為法館与大原君求各一冊、在六条不明通上珠数屋町 法寿寺之寓」¹⁵とある。明治二十九年（一八九六）十一月、五条高倉の為法館にて、了智が「大原君」と一冊ずつ購入したものと分かる。「大原君」は前述した真宗第一中学寮の同級生である法専寺の大原善俊であろう。その際、了智は六条不明通上珠数屋町の法寿寺（真宗大谷派）に滞在していた。本山東本願寺に

ほど近い寺院を宿として京都で学生生活を送っていた了智が、近所の本屋で真宗書を購入し、同級生と切磋琢磨して学問に励んでいた姿をうかがえる。

写本は五部ある。37『御文大綱聞記』は、嘉永四年（一八五一）四月三日に了智が清書し終えたものである。刊本または写本の同書を借り、書写して蔵書としたと考えられる。40『真宗聖教』は、教行信証や往生要集をはじめ様々な真宗聖教の一部を抜き書きした了智のノートである。

3. 真宗（勸化本）

「真宗（勸化本）」は十二部十六冊あり、写本一部以外は、江戸期に出版された刊本である。

勸化本とは、江戸期において直接・間接に在俗の人びとに対する仏教の教化を目的として著述され、刊行・書写された書物である。その内容は、經典・聖教を解説するもの、説話を集めるもの、寺院や仏像の縁起譚、高僧の伝記など多岐にわたる。¹⁶ 当文庫内勸化本で最も多いのは粟津義圭（一七三二カク九九）述であり、十部（刊本九部、写本一部）ある。粟津義圭は近江国膳所響忍寺（真宗東派）の次男として生まれ、高倉学寮で学んだ後、唱導談義を行う僧侶として活躍した人物である。当文庫のうち刊行が最も古いのは、43『大経和讃二十二首即席法談』である。親鸞の「浄土和讃」のうち、大経意の和讃二十二首を讃題として解説した内容である。義圭の著述には、門徒を直接の読者対象としたひらがな

本もあるようであるが、大半は片仮名漢字まじり本である。¹⁷ 当文庫本はすべて片仮名漢字まじりで書かれており、それらは僧侶が説教台本として用いることを念頭に執筆されている。当寺においても、門徒に対する法話・説教を行う際の参考書とされたのであろうか。

51『善光寺如来東漸録』は、初版が安永二年（一七七三）五月に上梓された義圭述の勸化本で、弘化三年（一八四六）初夏に再版されたものを、應通寺の了智が購入した。

41『浄土勸化言々海』は真宗西派の菅原智洞（一七二八く七九）の著述であり、42『譬喩願海鈔』も同人が閲している。両書とも勸化本にあたる。智洞は、義圭と並び称され、数多くの著述本が説教僧に用いられたという。¹⁸ 真宗東派寺院においても西派の説教者の勸化本を入手していることを確認できる意味で興味深い。後表紙見返しには「右の書物何方へ参候共早々御返済可被下候」とあり、同書が貸借されていたことが分かる。ただし應通寺の前の所蔵者と考えられる三河国工内所にある龍灯山（寺号不明）の光海という名もみられ、應通寺蔵書として貸借されていたかは判然としない。しかしその可能性も高いのではなからうか。

4. 真宗（講録）

講録とは、学僧による法話・演説・講義といった語りを聴衆の僧侶などが筆録したものである。貸借され、書写されることで、さらに流布していった。明治期以降には出版される動きも盛んになり、その一例とし

て前掲した33・35がある。ただし江戸期には基本的に写本として流布した。写本の講録七部七冊を「真宗（講録）」と分類した。一冊にいくつかの法話記録が掲載される場合も多い。53『亀洲講師法嘆記』は香月院深励（一七四九〜一八一七）の講録であり、「亀洲」は深励の号である。56『香樹院演説』は深励の弟子である香樹院徳龍（一七七一〜一八五八）と易行院法海（一七六八〜一八三四）の講録を所収している。三者とも学寮の「講師」職に就いている。口述時期の最も早いのは、53に所収されている53(2)「報恩講法談亀洲講師」で、文化五年（一八〇八）六月二十七日に深励が学寮でおこなった法談の記録である。門徒向けの法話とみられ、『真宗大系』に集録されているような深励の他の著書と比較しても、表現方法が簡易である。たとえば深励は53(2)において、報恩講をつとめるにあたって「祖師聖人ノ恩徳ハ山ヨリモ高ク海ヨリモ深シ、身ヲ粉ニシ骨ヲクタクキテモ報シアキノナヒ祖師ノ御恩徳」と賛嘆している。特定の聖教を取り上げるのではなく、「聖道・浄土」や「自力・他力」といった宗学の中でも親しみの深い言葉を用い親鸞の教えを、より多くの人びとへ分かりやすく伝えようとする配慮がみられる。

また講者は不明であるが、55『浄土文類聚鈔聞書』にも当時の学寮の学びの一端をみることができ、同書は大きく四段からなっている。第一段では、『浄土文類聚鈔』の書誌学的な検討が行われ、広略の前後についても言及されている。ちなみに本書では広前略後説を立てている。しかし、『浄土文類聚鈔』の内容はこの第一段でほぼ終わり、残る三段

は全て『教行信証』を主軸に真宗の教相について説かれている。三願・三経・三機・三往生や行信の位置づけなど、七祖を引き合いに出しながら祖意を尋ねている。まさに、『浄土文類聚鈔』の名を借りた『教行信証』の講義といった印象である。こういった点にも当時の学び方の特徴を見ることができ、

このような、京都の学寮で行われた法談の内容が書物化し書写されて流布することで、三河国の寺院にもたらされることとなったのである。語りが文字化されることで、その内容は地域や時代を越えて伝えられ受容されることとなった。講録は真宗の教えが広まっていく状況を把握しうる特徴的な書物であると考える。

58『岡崎菅生万徳寺了祥師法話聞書』は、三河国万徳寺（現・愛知県岡崎市明大寺本町）の了祥が、天保十年（一八三九）八月に行った法話の聞書を、弘化三年（一八四六）十月に應通寺の了睿なる人物が書写した写本である。了睿は深励の弟子である。父の義陶も、講師職に就任した理綱院慧琳（一七一五〜八九）の弟子であり、万徳寺は代々学僧を輩出する寺院であった¹⁹。應通寺の了睿は、同地域の学僧の法話聞書を借用して写したと言える。

当文庫の講録七部のうち、三部は了睿による書写である。文政九年（一八二六）六月に書写された55『浄土文類聚鈔聞書』が最も早い。前項で取り上げたように、37『御文大綱聞記』は嘉永四年に書写されており、了睿書写本の下限である。了睿は江戸後期に應通寺にて、書物を通

して真宗を研鑽した人物であると言えよう。了睿の頃から今に伝わる應通寺の書物が集積されていったのではなからうか。

5. 儒学

「儒学」の書物は十部三十二冊あり、すべて刊本である。四部は江戸期に刊行されたことが確かな書物である。60『大学章句』、62『論語集註』、63『孟子集註』にはいずれにも天明四年（一七八四）に求めたと記載されており、同時に購入された可能性が高い。66『大学』は應通寺の大河内了信なる人物が、明治二十三年（一八九〇）十二月からテキストとして用いた書物である。68『再刻 春秋左氏伝校本』と69『孝経』は了智所蔵が確かな書物である。いずれも嘉永期（一八四八〜五四）の出版である。幕末に出版された書物が明治期に至ってテキストとして読まれたことが分かる。江戸期において、儒学書は文字や読みを学ぶために用いられた一般的なテキストであり、それは真宗の僧侶や門徒であっても同様であった。京都府尋常中学校の教科書としても『論語』や『孟子』が挙げられている。⁴⁶⁾このような学問スタイルは明治にも継承されていたことが、当文庫の書物を通して確認することができた。

6. 史学、辞書、実学、文化、教育・心理・哲学

「史学」はすべて刊本の六部十冊あり、江戸期から昭和期のものまで、幅広い年代の書物を含む。了智所蔵本は71『十八史略』と72『十八史略

訓蒙』であり、同書は中国の太古から宋代までの史書である。室町期から江戸時代に盛んに読まれ、さらには明治以後も漢文教科書として用いられた。⁴⁷⁾京都尋常中学校でも、「講読」や「支那歴史」の教科書として挙げられている。⁴⁸⁾

76『合類大節用集』（刊本）は了智も所蔵した「辞書」である。77『諸国古伝妙薬集』（写本）は、刊本としても流布している『諸国古伝妙薬集』の書写の後に、「息合薬并針事諸書拔書」や様々な薬に関する情報を記録した書物であり、「実学」と分類した。

「文化」の書物は四部八冊あり、すべて刊本である。性質の異なる様々な時代の書物が混在するが、便宜上、「文化」としてくくった。江戸期の書物に、英一蝶（一六五二〜一七二四）の漫画をその没後の安永七年（一七七八）正月に刊行した78『群蝶画英』がある。また了智（鐵鷲）の所蔵が確認される79『日本人』は、国粹主義の思想・文化団体である政教社の機関誌であり、明治二十一年（一八八八）四月に創刊された。その創刊号には「大谷派本願寺を打撃す」と題する、当時の東本願寺の体質を批判する記事も含まれている。了智は本山である東本願寺に向けられた社会からの批判的見解をも認識しつつ、真宗大谷派の末寺僧侶としての姿勢を問い続けたのであろうか。

「教育・心理・哲学」にはいずれも近代の書物である四部四冊を分類した。85『鄙稿哲学論文 プラトーンとプラトーン以前ノ哲学トノ比較』は、青色野紙に記された「一部一年」の了智の論文である。了智がこの

学年に在籍したのは真宗大学のみであるため、明治三十一年（一八九八）の真宗大学在籍中に執筆した論文と判断できる。本来は書物にあたらないう。い形態であろうが、他の書物と一括で伝来しているため、写本として扱

五、應通文庫が入手される際の特徴

1. 施主・寄進人

分類別に應通文庫の書物を紹介してきた。ここで、当文庫の書物が入手されるに際してみられる特徴を二点指摘しておきたい。まず施主または寄進人の記されているものがある点である。7 『冠註講苑俱舍論頌疏』の後表紙見返しには、「施主 向田昇之進母」「酢屋庄左衛門」などの名前が記されている。また同書には、京都の書林澤田友五郎の朱印が捺印されており、了智所蔵であったことも分かる。つまり、向田昇之進母や酢屋庄左衛門を施主人として、京都の書林澤田から購入され、應通寺さらには了智の蔵書となったことが分かる。また34 『七祖御釈』のシリーズは、釈尼妙歙の寄進である。このように、施主あるいは寄進人をもととなって書物が購入されることは、仏教書あるいは寺院蔵書の特徴と言えよう。

2. 入寺による書物の持ち込み

二点目の特徴は、当寺へ入寺した人物が書物を実家から持ち込んだこととの分かる書物がいくつか認められることである。なお人物関係を把握するため「應通寺関係家系図」【図7】を参考されたい。

應通寺十二世の智香（一八九五〜一九六九）は了智没後、了智妻「はすの」の養子として入寺した人物である。その生涯は、子息智見によってまとめられた『分陀利華』から知ることができ。智香は明治二十八年（一八九五）三月二十八日に西

加茂郡挙母町下林（豊田市下林町）にある善宿寺（藤谷氏）の次男として生まれた。仏教学者として知られ、三河教校において了智の一級先輩でもある舟橋水哉（蓮泉寺）の仲介で善宿寺から應通寺へ養子に入ったという。18 『仏制比丘六物図依釈』には「踊躍山善宿寺」の朱印が捺印されており、善宿寺旧蔵であったことが分かる。6 『俱舍論頌疏』と8 『冠註略述法相義』二冊（上・中巻のみ）には智香の兄である「藤谷智水」の名

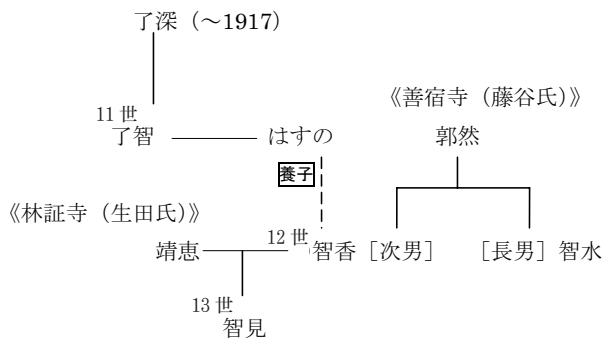


図7 應通寺関係家系図

が記されている。なお智水は、三河別院十代輪番に就任した人物である。²⁴⁾ 9『冠註略述法相義』一冊(上巻のみ)と重複しているのは、8がのちに智香によって持ち込まれたためであろうか。また67『春秋左氏伝』には智香の父郭然と兄智水の朱印が捺されている。智香が生家寺院から書物を譲り受けたことが分かる。一方36『真宗正依宝典 浄土三部妙典』には「生田亮歎扣」の朱筆がある。智香の妻靖恵は林証寺(真宗大谷派、北名古屋市徳重本郷、生田氏)の長女で、同朋大学の初代学長として知られる稲葉圓成(一八八一〜一九五〇)の姪でもあるという。²⁵⁾ 同書は靖恵が應通寺に嫁いだ縁で林証寺より持ち込まれたものである。以上のように、入寺を機に書物が移動する場合のあることが確かめられた。

六、おわりに

應通文庫の書物を分析することを通して、近世から近代にかけての、末寺僧侶の学び方の一端を知ることができたのではなからうか。当該期の仏教界において、「宗乗」を縦軸とするならば、「余乗」は横軸とする学びであった。つまり、宗乗・余乗という分類は、単に宗乗の優位性を強調することを目的としたものではない。宗乗の学びを深めるには、余乗の学びが重要であったのである。すなわち、祖師たる親鸞の教えに正しく領こうとするならば、まず諸宗の仏教教理学(「余乗」)を基礎に据えておく必要があった。両者の交流があればこそ、いよいよその研究に

深さと幅を与えるものである。だからこそ、應通文庫には宗乗のみならず余乗に関する書物が多く見受けられるのである。かかる性格は、当文庫のみならず、真宗寺院蔵書の一般的傾向であると考ええる。さらにそれは、地方教校や真宗京都中学など、宗門関係学校のカリキュラムを反映したものであったと言える。

江戸宗学の学問とは、随文解釈と言われ、科文・典拠・訓詁註釈に心が注がれていた。科文とは、経典や論書をその内容に合わせ目次的に整理する作業を指し、典拠とは引用文等の出典を明らかにすることを言う。そして訓詁註釈とは、言葉の一語一語を丁寧に吟味検討することを言う。

これら科文・典拠・訓詁註釈といった学問方法は應通文庫でも確認することができる。たとえば39『真宗三部経科本』は「科本」という名が示すとおり、三部経に対する科文を課題としている。『大経』について、浄影寺慧遠(五二三〜九二)や嘉祥寺古藏(五四九〜六二三)、または法然や存覚(一一九〇〜一三七三)の科文の区分を挙げている。また40『浄土論註講義』や41『仏説観無量寿経微笑録』では、それぞれのテキストの一節を抜き出し、それに対して多くの教証をあげ、詳細な註釈を行っている。

つまり、江戸宗学の学びとは一つの言葉、一つの表現を逐語的に解釈するところにその特徴があると言える。そこには宗祖・七祖の意を虚心坦懐に尋ねていく先学の姿が偲ばれる。また、もう一つの特徴として、

古来より「西・鎮・今」と呼ばれるように、証空（西山）・聖光（鎮西）・親鸞（今家）の三者の了解を比較し、親鸞における了解の独自性を求めながら、同時に浄土宗から浄土真宗への展開にも注意を払っている点である。

また学寮の伝統では、『教行信証』をテキストとする場合「会読」という方法が採用され、直接的に公然と『教行信証』を講義することはなかった。換言すれば『教行信証』は非公開の書であったのである。そこで『教行信証』に代わって講義されたのが『浄土文類聚鈔』や『教行信証大意』であった。⁽²⁶⁾

應通文庫には、江戸期の刊本で明治期にもテキストとして活用された書物、江戸期の講録が明治期に出版された書物も見受けられた。明治期と言えば近世教学（江戸宗学）から近代教学への移行期である。近代教学とは、一言で言えば学びの中に「主体性」が問われてきた時代である。それは清沢満之によって宗義と宗学の違いが明瞭化されたことを発端とする。他方、江戸宗学とは先述の如く、随文解釈と言われる精微な学びである。しかし、この両者は相反するものではないであろう。学びの主体性とは、その土台なくしては成り立たない。そしてその土台となったものは、間違いなく学寮における伝統的な学びであったはずである。大きな視野で言えば余乗の学びであり、細部という意味で言えば、科文・典拠・訓詁解釈といった学問方法を指す。その土台があればこそ、近代教学の掲げる「主体性」も実現できるのである。⁽²⁷⁾

現代を生きる我々にはその土台となるものが果たしてあるのだろうか。今こそ、先学の学問に対する姿勢と情熱に学ぶべきではないだろうか。

表 3 應通文庫目録

番号	分類	名称	口述者	場所	口述年代 和暦	西暦	員数	形態	刊 ／ 写	出版者	出版年和暦	西暦	撰者 著作者 ／ 編者 ／ 校正者	書写者 所蔵者 ／ 購入者	書写・ 入手年代 和暦	西暦	寸法 (縦)	寸法 (横)	備考
1	仏教	天台宗四 教五時西谷 名目	—	—	—	—	4冊	袋綴 刊本	—	五條通高倉東入／澤田 文栄堂／京都書林 菱屋 友五郎	元禄十一戊 寅歲臘月朔 旦	16981201	知積輪下 沙門 觀心誌	(朱印)「了智」	—	—	26.0	18.8	—
2	仏教	行香用心集	—	—	—	—	1冊	袋綴 刊本	—	長谷川市良兵衛開版	万治3年8月	16600899	—	大河内蔵	—	—	27.0	17.7	・(舊表紙見返り) 【明治稿五三河校 在学中古書店購得、源 即修表葉「沙門」源 智】(朱筆)】
3	仏教	天台四教義	—	—	—	—	2冊	袋綴 刊本	—	書林 浅野久兵衛	貞享5年仲 春	16880299	隋天台山修禪寺沙門了智撰	沙門 源智、 了智	明治25年	18929999	27.4	18.5	【明治稿五三河校 在学中古書店購得、源 即修表葉「沙門」源 智】(朱筆)】
4	仏教	阿毘達磨俱 舍論四紀	—	—	—	—	3冊(2 ～4巻 のみ、 1巻欠)	袋綴 刊本	—	銅陀坊書林村上平榮寺	元禄8年7月	16950799	—	(朱印)「了智」	—	—	27.3	19.3	—
5	仏教	華嚴五教章	—	—	—	—	3冊(上・ 中・下 巻)	袋綴 刊本	—	京都書肆 永田調兵衛	宝暦4年7月	17070799	法蔵 撰	(朱印)「鷹見」	—	—	26.1	18.5	—
6	仏教	俱舍論頌疏 述	中大雲寺 沙門圓輝 述	—	—	—	1冊(論 本第3 ～7の み)	袋綴 刊本	—	—	—	—	—	藤谷智水	—	—	27.1	19.2	—
7	仏教	冠註講苑撰 舎論頌疏 述	中大雲寺 沙門圓輝 述	—	—	—	11冊 (巻2・ 3・7欠)	袋綴 刊本	—	樽桑園皇藏書房 三木太 郎左衛門 前川茂右衛門、 山本平左衛門、上村文右 衛門、井上忠兵衛、出雲 寺和興撰 空刻	宝永5年10 月	17081099	樽桑浪華僧清鳳撰	参河國瀧美郡豊 橋町大字花園 鐵藏生了智、 三河鐵橋周部一 菜(花押) 周部	—	—	27.9	19.2	・(舊表紙)「共十四」 ・(後表紙見返し)巻6・ 11～14)「施主 向田 返」巻8)「許屋庄左 衛門」(後表紙見返し 巻9)「(釈妙尊尼 押 野屋茂右工門母) (見 七消乎)」 ・(朱印)「書林／西 京五條通高倉東へ入 ／〓澤田友五郎」
8	仏教	冠註略述法 相義	—	—	—	—	2冊 (巻上・ 中O分)	袋綴 刊本	—	小林大空蔵	明治16年 12月出版	18831299	権大教正卍山弁梅題 権中講義小林大空校 註	鹿野(朱印)「真宗 ／三州」(中学印) (藤谷智水)(朱筆)	—	—	26.4	18.5	—
9	仏教	冠註略述法 相義	—	—	—	—	1冊(上 巻のみ)	袋綴 刊本	—	小林大空	明治16年 12月	18831299	—	—	—	—	18.4	26.5	—
10	仏教	十二門指 要妙会本 禮	宋 四明 沙門 知 禮	—	—	—	2冊(上・ 下巻)	袋綴 刊本	—	発売人 台宗書林 東京 下谷区南稻荷町七番地 和泉屋庄次郎	明治19年 3月出版	18860399	—	—	—	—	25.8	18.2	—

番号	分類	名称	口述者	場所	口述年代 和暦	西暦	頁数	形態	刊 ／ 号	出版者	出版年和暦	西暦	採者 採作者 編者 校正者	書写者 所蔵者 購入者	書写・ 入手年代 和暦	西暦	寸法 (縦)	寸法 (横)	備考
11	仏教	百法明空抄	—	—	—	—	3冊(1・ 3・4巻 のみ)	袋綴	刊本	京都書林 出版人 京都府平民 永田長左衛門五番戸、出版人 京都府平民 澤田友五郎 下京区第拾九組蓮籠町三番戸	明治19年	188449999	攝藏居士 青巒 (明言)	職 (朱印)「菅深」(朱印)「智」 蓮通寺書院	—	—	25.8	18.1	—
12	仏教	七十五法名 目攝疏	—	—	—	—	2冊	袋綴	刊本	出版人 京都府平民 西村七兵衛 下京区第三十組中珠数屋町烏丸東工入二十人講町廿二番戸、出版人 京都府平民 西村九郎 左衛門 下京区第三十組下珠数屋町東河院西入入橋町八番戸、空 京都府平民 永田長左衛門五番戸、下京区第廿三組蓮籠町九番戸	明治20年 2月25日刻 成	18870225	編輯者 大阪府平民 藤井慈辨 和泉国 日根郡樽井村	大河内了智 (朱印)「源智」 參陽とよはし 鳳藏居士	—	—	25.4	18.2	—
13	仏教	冠註八宗綱 要	耀然大徳 述	—	—	—	1冊	袋綴	刊本	下京区第廿三組蓮籠町九番戸	明治20年 10月9日刻 成発売	18871005	攝藏蓮燈杉原春洞同 師覆註	應通寺住職沙弥 大河内了智所撰 應通寺沙弥大河 内了智所持	—	—	25.9	18.3	—
14	仏教	冠導増補戒 唯識論	—	—	—	—	7冊(1 〜3巻、 7〜10 巻)	袋綴	刊本	発行 京都府平民 西村七兵衛(朱印)「法藏館」 ／幹事印」下京区第三十組二十人講町二十二番戸法藏館	明治21年 6月5日出版	18880605	・護法菩薩造三藏法師玄奘奉 詔訳、扶雅 著作。 ・仏入滅後二千八百三十七年 明治二十一年三月於洛東泉山冠導増補畢 比丘 旭雅、向 攝參畢 真宗不学 蓮燈	—	—	26.7	19.3	—	
15	仏教	私註妙法蓮 華經	—	—	—	—	5冊(1 巻下・2 巻上・3 巻中巻・ 8巻のみ)	袋綴	刊本	—	—	—	—	道輝拜読 (朱印)「青木山 ／藏書印」	—	—	27.8	19.3	—

番号	分類	名称	口述者	場所	口述年代 和暦	西暦	頁数	形態	刊 ／ 写	出版者	出版年和暦	西暦	採者 著作者 編者 校正者	書写者 所蔵者 購入者	書写・ 入字年代 和暦	西暦	寸法 (縦)	寸法 (横)	備考
27-1	真宗	七祖御釈 三安集	—	—	—	—	1冊	袋綴 刊本	—	永田調兵衛 丁子屋兵衛 丁子屋九郎右衛門 丁子屋平兵衛	嘉永2年 正月	18490199	釈道神撰	—	—	—	27.1	18.9	・(裏表紙見返) 「寄進釈尼妙敷」
27-2	真宗	七祖御釈 五部九卷 玄義分 四	—	—	—	—	1冊	袋綴 刊本	—	—	—	—	沙門善導集記	—	—	—	27.1	18.9	・(裏表紙見返) 「寄進釈尼妙敷」
27-3	真宗	七祖御釈 五部九卷 定講義 散講義 五	—	—	—	—	1冊	袋綴 刊本	—	—	—	—	沙門善導集記	—	—	—	27.1	18.9	・(裏表紙見返) 「寄進釈尼妙敷」
27-4	真宗	七祖御釈 五部九卷 法事禮 念法門 六	—	—	—	—	1冊	袋綴 刊本	—	—	—	—	沙門善導集記	—	—	—	27.1	19.0	・(裏表紙見返) 「寄進釈尼妙敷」
27-5	真宗	七祖御釈往 生要集 十	—	—	—	—	1冊	袋綴 刊本	—	京師 書林 西六条花屋町小路東入 町 永田調兵衛、趣井通 魚堀上町 丁子屋庄兵衛、 東六条下数珠屋町 丁子 屋九郎右衛門、東六条角 棚間之町東入町 丁子屋 平兵衛	嘉永2年 正月	18490199	天台首楞嚴經沙門 源信撰	—	—	—	27.1	18.9	・(裏表紙見返) 「寄進釈尼妙敷」
28	真宗	文類聚抄 入 出二門偏 合刻	—	—	—	—	1冊	袋綴 刊本	—	—	嘉永7年 再刊	18540999	—	(朱印)「了智」	明治21年 11月	18881199	26.7	19	↑明治廿九年十一月於五条高倉為法館 与天原君求各一冊、 在六条不明通上珠数 屋町 法壽寺之寓」
29	真宗	真宗正依宝 典 淨土三 部妙典	—	—	—	—	1冊	袋綴 刊本	—	真宗御書物所 京東六条 中珠数屋町 丁子屋七兵 衛	明治10年 3月29日	18770325	—	(生田亮敬扣) (朱筆)	—	—	16.9	12.1	—
30	真宗	真宗校本七 祖聖教	—	—	—	—	3冊	袋綴 刊本	—	出版人 京都府平民 西 村九郎右衛門 下京区第 卅組下珠数屋町東洞院西 江入橋町九十二番地、 同 永田調兵衛 京都府 平民 下京区第廿三組花 屋町油小路 東江入山川 町二百七十二番地、ほか 4名	明治12年 3月	18790399	—	(朱印)「了智」 三洲堂橋町字花 園 大永山藏	明治28年	18959999	27.0	22.1	—

番号	分類	名称	口述者	場所	口述年代 和暦	西暦	頁数	形態	刊 ／ 写	出版者	出版年和暦	西暦	採者 著作者 編者 校正者	書写者 所蔵者 購入者	書写・ 入手年代 和暦	西暦	寸法 (縦)	寸法 (横)	備考
31	真宗	御文 (1～5帖目)	—	—	—	—	1冊	袋綴	刊本	出版者 同 佐藤興介 同名古屋区江川町四丁目 百七十九番屋敷	明治15年 6月25日	18820625	校正者 愛知縣下平 民 太田幸太郎 尾 張国西春日井郡下小 田并村五百九十一番 邸	—	—	—	21.4	14.7	—
32	真宗	訓点 占部 観願編撰 真宗三部経 科本	—	—	—	—	1冊	袋綴	刊本	出版人 京都府平民 西 村七兵衛 下京区第三十 船中珠数屋町通烏丸東へ 入二十八人講町二十二番戸	明治19年 9月25日	18860925	編輯者 愛知県平民 占部観願、三河国權 十 四番地	(朱印)「了智」	明治29年 春春力	18960399	16.8	11.9	「閉経傳／无上甚深 微妙法 百千万劫／ 難逢遇／我今覓彼得 受持／願解如来眞要 義／明治廿九暮春桜 花散乱時／一葉逐月 香河 了智拜写」
33	真宗	淨土論註講 義	閉悟院靈 辰述	—	—	—	5冊(1・ 2・4・9・ 7巻のみ)	袋綴	刊本	西村九郎右衛門	明治25年 1月	18920199	占部観願醫師院、 藤谷寛燈編輯	—	—	—	21.9	15.4	—
34	真宗	仏説観無量 寿経歎安録	—	—	—	—	2冊	袋綴	刊本	版權譲受／発行兼印刷者 ／京都市下京区中珠数屋 町烏丸東入二十八人講町 二十二番戸／西村七兵衛 ／発行所 法藏館	明治28年 10月30日 第二版発行	18951030	真宗大講師 梅着龍書	日曜講得 (朱印)「おほ か／うち」 (朱印)「了智」	明治29年 3月8日	18960308	18.8	13.3	・法藏館講義録第十 二編。
35	真宗	選訳本願念 仏集講判	故靈濟院 南條伸興 講師講述	—	—	—	2冊(1・ 4・5巻 のみ)	袋綴	刊本	発行者兼印刷 京都市下 京区下珠数屋町東河院西 入橋町八番戸 西村九郎 右衛門	明治30年 6月25日	18970625	文学博士南條文雄学 師校院、木全義順校 正	(朱印)「了智」	—	—	22.6	15.3	—
36	真宗	七祖概要・ 灯 真宗歴代伝	—	—	—	—	1冊	冊子	刊本	仏教学会蔵版	—	—	蘭講 河野法雲、嗣 講 斎藤唯信	—	—	21.1	14.7	—	
37	真宗	御文大綱簡 記	—	—	—	—	1冊(下 巻のみ)	袋綴	写本	—	—	—	—	應通寺了譽 (朱印)「應通寺 印」	嘉永4年 4月3日 清書終	18910403	24.4	17.0	—
38	真宗	淨土論註講 義録	—	—	—	—	1冊	反綴	写本	—	—	—	—	—	明治30年 10月5日	18971005	25.2	17.8	・初文办。 ・「實向応答日記」(明 治三十年十月五日配 あり)。
39	真宗	淨土和實二 十一首註解	—	—	—	—	1冊	袋綴	写本	—	—	—	—	—	—	—	24.4	17.1	—
40	真宗	真宗聖教	—	—	—	—	1冊	袋綴	写本	—	—	—	—	(朱印)「誓／深」	—	—	23.5	16.6	・教行信証、往生要 集ほか。

番号	分類	名称	口述者	場所	口述年代 和暦	西暦	頁数	形態	刊 / 写	出版者	出版年和暦	西暦	採者 著作者 編者 校正者	書写者 所蔵者 購入者	書写・ 入手年代 和暦	西暦	寸法 (縦)	寸法 (横)	備考
41	真宗 (勅化 本)	浄土勤信々々 海	釈智洞述	—	—	—	1冊(巻 中のみ)	袋綴 刊本	—	—	(寛延3年)	17509999	—	三州吉田 應通寺	—	—	25.6	17.9	「右の書物何方へ参 被下候」三和工内所 持主「光海」三州工 内所羅燈山主とあ り。
42	真宗 (勅化 本)	聖燈顯海鈔	美濃房島 釈善以 述	—	—	—	1冊(巻 30のみ)	袋綴 刊本	—	—	(宝暦3年)	17539999	能登菅原 閑	應通寺 什物	—	—	25.9	17.8	—
43	真宗 (勅化 本)	大慈和譜二 十二首即席 法談	栗津義主 述	—	—	—	1冊(下 巻のみ)	袋綴 刊本	—	—	安永2年 孟春	17730199	—	吉田應通寺什物	—	—	25.9	18.3	—
44	真宗 (勅化 本)	御伝鈔演義	栗津釈義 主述	—	—	—	1冊(初 編巻1 ～3台 冊)	袋綴 刊本	—	京都書肆 五条通高倉東 へ入町 北村四郎兵衛、 寺町通松原上ノ町 菊屋 七郎兵衛、寺町通松原下 ノ町 菊屋喜兵衛、寺町 通松原下ノ町 藤屋東七 郎	安永3年3月	17740399	—	—	—	—	27.0	18.0	—
45	真宗 (勅化 本)	御伝鈔演義 初編	栗津 釈義主 述	—	—	—	1冊(巻 2のみ)	袋綴 刊本	—	—	(安永3年)	17749999	—	—	—	—	25.7	18.3	—
46	真宗 (勅化 本)	観八幡十四 首即席法談	栗津義主 述	—	—	—	2冊	袋綴 刊本	—	書林 大坂高麗橋一丁目 藤屋弥兵衛、同心斎橋筋 唐物町 北田清左右衛門、 京永六條下珠敷屋町 丁 字屋九郎右衛門、同寺町 通松原下ノ町 菊屋喜兵 衛	安永4年 孟春	17750199	—	(朱印)「應通寺 印」 吉田應通寺	—	—	26.6	18.0	—
47	真宗 (勅化 本)	改悔文便箋 本	栗津義主 述	—	—	—	2冊	袋綴 刊本	—	皇都書林/「寺町通松原 下ノ町/菊屋喜兵衛/東 九條右衛門/寺町通五兵 衛 上ノ町/天王寺屋市郎兵 衛	天明2年1月	17820199	—	(朱印)「ミカワ ノヨツタ/應通 寺」 吉田應通寺什物	文政9年 7月癸之	18280799	26	18.2	—
48	真宗 (勅化 本)	宋代無智燈 訓	(栗津義 主述)	—	—	—	3冊	袋綴 刊本	—	書肆 大坂心斎橋南慶町 法川清右衛門、京都東六 条中ノ珠敷屋町黒石七兵 衛、同五条橋通高倉東江 入町北村四良兵衛	天明6年 朔旦冬始日	17880101	—	(朱印)「應通寺印」 (朱印)「ミカワ/ ヨツタ/應通寺」 三州吉田 應通 寺	—	—	25.6	27.7	—

番号	分類	名称	口述者	場所	口述年代 和暦	西暦	頁数	形態	刊 ／ 写	出版者	出版年 和暦	西暦	採者 著作者 編者 校正者	書写者 所蔵者 購入者	書写・ 入手年代 和暦	西暦	寸法 (縦) (横)	備考	
54	真宗 (講録)	香月院講師 法話	香月院 (深助)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
54	真宗 (講録)	香月院講師 法話	香月院 (香月院 深助)	御自坊	文化9年8 月27日	18120827	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
54	真宗 (講録)	香月院講師 法話	香月院 (深助)	御自坊	同28日	18120828	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
55	真宗 (講録)	浄土文類聚 鈔開書	講者不詳	—	—	—	1冊	袋綴 写本	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
56	真宗 (講録)	香樹院演説	—	—	—	—	1冊	袋綴 写本	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
56	真宗 (講録)	開講香樹院 演説	開講香樹 院	於總会所 対在英語 行	文政13年 正月6日	18300106	—	—	—	—	—	—	—	實門	文政13年 閏3月27 日写得之	18300327	—	—	—
56	真宗 (講録)	易行院講師 演説	易行院講 師	於總会所 対在英語 行	文政13年 4月	18300499	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
56	真宗 (講録)	易行院講師 演説	易行院講 師	—	(文政13 年)寛4月 8日未起	18300408	—	—	—	—	—	—	—	—	文政13年 6月22日 写得之	18300622	—	—	—
56	真宗 (講録)	開講易行院 演説	開講易行 院	於總会所	[] 4日辰起	99999904	—	—	—	—	—	—	—	實門	—	—	—	—	—
57	真宗 (講録)	大無量壽經 下巻法話	易行院講 師述	—	—	—	1冊(下 巻のみ)	袋綴 写本	—	—	—	—	—	大永山應通寺 了譽	天保6年 2月27日 写得之	18350227	23.5	16.2	—
58	真宗 (講録)	岡崎實生万 徳寺了祥師 法話開書	岡崎管生 万徳寺了 祥	—	天保10年 8月8日後 座 同月 12日卯座 同日後座	18390808	1冊	袋綴 写本	—	—	—	—	—	吉田應通寺了譽	弘化3年 10月	18461099	23.9	17.0	—
59	真宗 (講録)	散異抄唱簿 集	—	—	—	—	1冊	袋綴 写本	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
60	佛学	大学章句	—	—	—	—	1冊	袋綴 刊本	—	—	—	—	—	持主求馬、 大永山長丸、 應通寺了觀	天明4年 求之	17849999	26.8	18.7	—
61	佛学	中庸章句	—	—	—	—	1冊	袋綴 刊本	—	—	—	—	—	寛壽(印)、 三州吉田 應通寺	—	—	20.7	19.1	「四書所持」とあり。

番号	分類	名称	口述者	場所	口述年代 和暦	西暦	頁数	形態 刊／ 写	出版者	出版年和暦	西暦	採者 著作者 編者 校正者	書写者 所蔵者 購入者	書写・ 入手年代 和暦	西暦	寸法 (縦) (横)	寸法 (縦) (横)	備考
62	儒学	論語集註	—	—	—	—	2冊	袋綴 刊本	—	—	—	朱熹集註 校正者	—	天明4年 求之	17849999	26.8	18.8	—
63	儒学	孟子集註	—	—	—	—	4冊	袋綴 刊本	書肆 二條通衣櫛角 風月荘左衛門 刊行	寛文7年 正月	16670199	朱熹集註、 相国李先生校正	三州吉田 大永 山、 (朱印)「ミカフ ／ヨツカ／應通 寺」	天明4年 求之	17849999	27.0	18.8	—
64	儒学	孟子集註	—	—	—	—	3冊(巻 1欠、 巻2~4 のみ)	袋綴 刊本	—	寛文9年2月	16690299	朱熹集註	—	—	—	27.2	19.3	—
65	儒学	天原校正 孟子 道春 點	—	—	—	—	2冊	袋綴 刊本	—	—	—	朱熹集註	—	—	—	26.5	18	—
66	儒学	大学	—	—	—	—	1冊	袋綴 刊本	—	—	—	—	大字花園大河内 了信(朱印)、 明治24年 1月の前 月である 明治23年 12月より 了信所持	18901299	24.8	17.7	—	
67	儒学	春秋左氏伝	—	—	—	—	9冊(欠 あり)	袋綴 刊本	—	—	—	—	(朱印)「藤谷/ 曾次」、「藤谷/ 藤然」	—	—	27.9	19	—
68	儒学	再刻 春秋 左氏伝校本	—	—	—	—	8冊(欠 あり)	袋綴 刊本	発行書房 江戸日本橋通 一丁目 須原屋茂兵衛、 同二丁目 山越屋佐兵衛、 同芝神明前 岡田屋嘉七 京御幸町御池南 製屋珠 兵衛、大阪心齋橋南一丁 目 敦賀屋九兵衛、同安 堂寺町 敦賀屋彦七、同 □□金四町 象牙屋治郎 兵衛	嘉永3年 秋再刻	18509999	尾張 桑鼎先生校読 筆	(朱印)「了智ノ 鉄齋仙史蔵(朱 筆)」	—	—	24.4	17.4	—
69	儒学	孝経	—	—	—	—	1冊	袋綴 刊本	東都 紫芝園藏版(朱印) 行 書肆嵩山房小林新兵衛 書林 京都 額田正三藏 江戸 須原茂兵衛、同 前川六左衛門、同 西村 源六、同 同 宗七、大 阪 宜英堂 葛城長兵衛	嘉永2年3月	18490399	—	菅溪必携	—	—	26.6	17.5	*記載のある一紙(郵 紙)がはさまれてい る。
70	史学	和漢年紀	—	—	—	—	1冊	袋綴 刊本	—	文化13年	18169999	—	應通寺什物、 (朱印)「應通寺 印」、 三州吉田應通寺	天保4年 林鐵求之	18330699	26.5	18.2	—

番号	分類	名称	口述者	場所	口述年代 和暦	西暦	員数	形態 刊／ 写	出版者	出版年和暦	西暦	採者 著作者 編者 校正者	書写者 所蔵者 購入者	書写・ 入手年代 和暦	西暦	寸法 (縦)	寸法 (横)	備考
71	史学	十八史略	—	—	—	—	4冊(1・ 2・3・7 巻のみ)	袋綴 刊本	京都書林 下京区第四区 三條通柳馬場西入町 出 版人 川端義兵衛(印) 下京区第四区三條通高倉 東入町 出版人 出雲寺 文次郎、上京第卅区御幸 町御池下小町 出版人 藤井孫兵衛	明治12年 1月28日	18790128	—	鹿高知聖、 豊橋町大字花園 大河内了智	—	—	26.0	18.4	—
72	史学	十八史略訓 讀	—	—	—	—	2冊(2 巻・4巻 のみ)	袋綴 刊本	出版人 岐阜県平民 水 谷善七 岐阜県下回国第 一大区一小区厚鼻郡岐阜 柳屋町一番地住	明治12年 7月発売	18790799	編輯人 岐阜県 平 尾 長彌 同県 下美濃国第一大区十 四 小区各務郡前渡 村四番地住	大河内了智、 富沢散史、 豊橋町大字花園 大河内了智所有	—	—	18.0	12.6	—
73	史学	皇室と真言 宗	—	—	—	—	1冊	冊子 刊本	発行所 京都市下京区三 哲通大宮東入一番戸 六 大新報社	大正4年 11月1日	19151101	編輯兼発行者 京都 市下京区三哲通大宮 東入一番戸 相風 寛 樹会、右代善孝 京 都市七條大宮西入花 畑町五百八十二番地 石堂善達	(朱印)「豊橋/ 権行社/印章」	—	—	26.2	18.9	—
74	史学	愛知県縣誌写 郡寺津村誌	—	—	—	—	1冊	冊子 刊本	発行所 寺津村役場	大正12年 12月20日	19231220	編輯人/愛知県精豆 郡得地村大字市子/ 名倉平三郎	—	—	23.0	15.2	— ・非売品。	
75	史学	古代之東三 河	—	—	—	—	1冊	冊子 刊本	発行所 愛知県豊橋市船 町二十八番地 豊橋成古 会	昭和9年 11月8日 発行	19341108	豊田珍彦 著	—	—	24.2	16.3	— ・同好頒布。 ・限定200部のうち第 47号。	
76	辞書	合類大節用 集	—	—	—	—	2冊(巻 8・9の み)	袋綴 刊本	平楽寺蔵版	—	—	—	(朱印)「菅深」、 (朱印)「葉鶴文 庫」	—	—	22.8	15.9	—
77	美学	龍圖古伝妙 集	—	—	—	—	1冊	袋綴 写本	—	—	—	—	—	—	23.3	15.6	—	
78	文化	群蝶圖英	—	—	—	—	3冊	袋綴 刊本	発行者 東京府平民 江 島伊兵衛 日本橋区通四 丁目十番地、発行者 同 青野友三郎 京橋区大藏 町三番地 (印)「書籍出版/発行所 /京郡三條通御幸町角/ 吉 大谷仁兵衛」	安永7年 正月	17780199	編輯兼画工者 故人英一蝶	—	—	25.5	18.7	—	
79	文化	日本人	—	—	—	—	3冊(突 地・入) 冊子 (雑誌 誌)	刊本 刊本	(敬社)	明治21年 4月創立~ 明治32年 4月20日	18880499	—	鐵齋	—	—	25.7	18.4	—

番号	分類	名称	口述者	場所	口述年代 和暦	西暦	頁数	形態	刊 ／ 写	出版者	出版年和暦	西暦	採者 著作者 編者 校正者	書写者 所蔵者 購入者	書写・ 入手年代 和暦	西暦	寸法 (縦) (横)	寸法 (縦) (横)	備考
80	文化	豊田哲夫追 悼文集 ひとつ紙篇	—	—	—	—	1冊	冊子	刊本	豊田市瓦町字臨濟寺前二 十七番地 豊田珍彦	昭和11年 11月1日	19361101	編譯者 白井一二	—	—	—	23.2	16.2	—
81	文化	唐水仙(千 図栄歌集)	—	—	—	—	1冊	袋綴	刊本	—	昭和38年 6月	19630699	—	—	—	—	20.7	14.7	千図栄 歌集。
82	教育・ 心理・ 哲学	宗敎と教育 に關する学 説及実察	—	—	—	—	1冊	冊子	刊本	発行所 東京府豊嶋町二 丁目三十五番地 無我山 房	大正2年 11月5日	19131105	編者 大谷大学尋源 会、石代美、京都市 關 根仁應	—	—	—	22.3	15.1	—
83	教育・ 心理・ 哲学	保姆用教育 学	—	—	—	—	1冊	冊子	刊本	発行所 東洋圖書株式合 資会社	昭和3年 7月25日 再版発行	19280725	著作者 森川正雄	—	—	—	22.6	15.9	—
84	教育・ 心理・ 哲学	高等心理学 筆記	文学士 元田龍佐 口述	—	—	—	1冊	冊子	写本	—	—	—	—	—	—	—	21.6	15.2	—
85	教育・ 心理・ 哲学	郵筒哲学論 文フクロト ソ以前の哲 学トノ比較	—	—	—	—	1冊	仮綴 (青 色紙 綴)	写本	—	—	—	一部一年 大河内了智	—	—	—	24.2	16.6	—

註

- (1) 石川洋子・黒田佳世・高橋良政編「同朋大学佛教文化研究所蔵古書目録」(『同朋大学佛教文化研究所紀要』第十六号、一九九七年)、同編「同」(『同』第十八号、一九九九年)、高橋良政編「同」(『同』第二十六号、二〇〇七年)、同編「同」(『同』第二十八号、二〇〇九年)。
- (2) 大河内智見「分陀利華」(應通寺親鸞聖人七百回御遠忌事務局、一九六八年) 四七頁。
- (3) 『豊橋市史』第一卷(一九七三年) 五二九頁、『念佛再興―豊橋別院開創三百五十年記念誌―」(真宗大谷派豊橋別院、一九九五年) 二二三頁。
- (4) 前掲註(2)「分陀利華」四九頁。
- (5) 『本山事務報告』第四十号(真宗大谷派本願寺事務所文書科、一九九七年)、『大谷中高等学校九十年史』(大谷中高等学校、一九六四年) 八七頁。
- (6) 『無盡燈』第三卷第十一号(一八九八年十一月発行) 七五〜七六頁、『同』第六卷第二号(一九〇一年二月発行) 七九頁。
- (7) 大河内了智「健全なる青年」(法蔵館、一九〇〇年)、同「教如上人」法蔵館、一九〇一年。なお『無盡燈』第六卷四号(一九〇一年十月発行)に「鐵鷲子著」として「教如上人」の広告が掲載されている。
- (8) 『精神界』第一卷三号(一九〇一年三月十五日発行) 三一〜三二頁。
- (9) 「教校課程並書目表」(『本山報告』第三十七号付録、一八八八年)、『京都尋常中学校学科課程表』(『本山報告』第四十八号付録、一八八九年)。
- (10) 「余乗」と「近代仏教学」については、大谷大学仏教学会編『仏教学への道しるべ』(文栄堂、一九八〇年)、末木文美士「特論 仏教研究方法论と研究史」『新アジア仏教史十四 日本IV 近代国家と仏教』(成成出版社、二〇一一年)に詳しい。
- (11) 『本山事務報告』第二十三号(真宗大谷派本願寺事務所文書科、一八九五年)に、第一中学寮第一部三年級修了生の名簿に両人の名前が掲載されている。
- (12) 「真宗中学学科程度表」明治二十九年(一八九六) 六月五日制定
- (13) 『国史大辞典』(吉川弘文館、一九八四年)。
- (14) 真宗典籍刊行会編『真宗大系』第三七卷(国書刊行会、一九一七年) 三一八、三二六頁。
- (15) 明治二十六年(一八九三) 五条通御幸町角で、丁字屋九郎右衛門の三男が創業。通称西十。のちに五条高倉角、さらに昭和十四年(一九三九) 上珠数屋町烏丸東入へ移転。当初より真宗関係の仏教書を主に、昭和十四年ごろまで出版を続け、その後、古書販売のみ継続。平成四年(一九九二) 閉店。『京都出版史 明治元年―昭和二十年』京都出版史刊行会、一九九一年、六三〇頁。西村七兵衛「老舗出版社の歩みから見る近代京都の出版史」『図書館きょうと』No. 四〇、京都府立図書館、二〇〇三年)。
- (16) 後小路薫「勸化本の展開―四十八願を主題とするもの―」(『勸化本の研究』和泉書院、二〇一〇年、初出一九八二年) 三頁。同「近世勸化本刊行年表」(『同』初出一九七八年)、同「増訂 近世勸化本刊行略年表」(『同』初出二〇〇四年)。
- (17) 後小路薫「義主著述略考」(前掲註(16)「勸化本の研究」初出一九八三年)。
- (18) 『真宗人名辞典』(法蔵館、一九九九年)。
- (19) 住田智見撰「大谷派先輩学系略」真宗典籍刊行会編『真宗大系』第三七卷(国書刊行会、一九一七年)、岡崎正謙編「真宗大谷派学匠学系略」(木津無庵編「貫珠院遺稿」破塵閣書房、一九三三年)。
- (20) 「京都尋常中学校学科課程表」(『本山報告』第四十八号付録、一八八九年)。
- (21) 『日本国語大辞典』(小学館)。
- (22) 「京都尋常中学校学科課程表」(『本山報告』第四十八号付録、一八八九年)。
- (23) 前掲註一「分陀利華」。
- (24) 「親鸞聖人七百回忌・三河別院開創百年記念碑」一九八八年四月建立。前掲註(2)「分陀利華」七五頁。
- (25)

(26) 安富信哉「近代における浄土教研究―近代真宗学の方法論―」『親鸞教学』九十七号、二〇一一年。

(27) 後藤智道氏は、近代教学を生み出す土壌として、江戸宗学が果たした役割を明らかにするため、香月院深励の学風を取り上げている。江戸宗学にみられる「訓詁註釈学」という学問方法は、国学や儒学など諸領域の影響を受けての時代的特徴であり、それは民衆の信仰心に応答する「自信教人信」の精神に基づくものであると評価しており、本稿の趣旨と共通する。(後藤智道「江戸期宗学の性格と信仰―香月院深励の学風を通して―」『真宗研究』第五十六輯、真宗連合学会、二〇一二年)

《付記》

本稿は、「三、大河内了智」を中川、「四―1. 仏教」「六、おわりに」を藤村、「四―2. 浄土、真宗」「四―4. 真宗（講録）」「六、おわりに」を市野、その他を松金が主に分担執筆しました。

應通寺より貴重な書物をご寄贈いただきましたことを、この場をお借りして、心より御礼申し上げます。